

寺社Now

www.jisya-now.com

寺社の“いま”を伝える情報誌

vol.23

新春特別鼎談

第22代文化庁長官

宮田亮平

新・文化庁元年

文化・伝統の活用、そのための方策。

特集

雑誌の誌面から寺社が発信すべき内容を知る

人気雑誌の編集長に聞く
「寺社の魅力とは？」

インタビュー

真言宗大宝山 権現院千光寺 住職

多田真祥



- 02 新春特別鼎談
**第22代文化庁長官
宮田亮平**
新・文化庁誕生
文化・伝統の活用、そのための方策
- 06 観光の未来を考える
ユネスコ文化サテライト勘定技術諮問委員会
第1回会議が日本で初開催
- 08 新風
NEWS 1/ 比叡山延暦寺のカフェで「梵字ラテ」が話題沸騰
NEWS 2/ カプセルコレクションにリアルな鳥居が登場
NEWS 3/ 和宗仏教青年連盟による英語の絵解き
- 10 特集
雑誌の誌面から、寺社が発信すべき内容を知る
**人気雑誌に聞く、
寺社の魅力とは？**
- 12 寺社の魅力とは？
- 14 寺社にこれから期待すること
- 16 旅行者の動向から今後の寺社観光を考える。
株式会社JTB総合研究所主席研究員 河野まゆ子
- 18 インタビュー
古き良き日本を感じる尾道の町で、素晴らしい景観と共に仏縁と出会う
真言宗大宝山 権現院千光寺 住職
多田真祥
伝統を未来へ～From the Past to the Future～
- 24 時代に合わせた形で島の活性化を図る
志賀海神社権禰宜 平澤憲子
- 25 彫刻作品で寺社の個性を表現する
南部白雲木彫刻弘法 三代目白雲・秀水
- うちのお宝
- 26 真言宗東寺派 真浄山大師寺 寝弘法さん
- 27 八雲神社 龍の鍔絵
- 28 テラハクレポート/おおま宿坊 普賢院(青森県)
- 30 [特別寄稿]野田博明「風まかせ」
第23回(最終回)「迷宮の扉を開き、さらに奥を訪ねて寺社行脚は続く」



マンション

商業施設

賃貸住宅
「シャームゾン」



高齢者向け
住宅



クリニック



オフィス



積水ハウスの 土地活用

土地を活かす。地域が活きる。

土地活用とは、土地の価値を地域に活かすこと。積水ハウスは、住宅のリーディングカンパニーとして培ってきた総合力で土地の可能性を引き出してきました。入居者の多様なニーズに対応する賃貸住宅「シャームゾン」や高級感あふれる中高層マンション、時代が求める高齢者向け住宅など、地域貢献につながる土地活用を積水ハウスがご提案します。



積水ハウス株式会社 西日本特建支店

〒531-0076 大阪市北区大淀中1-1-93 梅田スカイビルガーデンシックス4F



土地活用に関するご質問やご相談についてもお気軽にどうぞ。

0120-131-470

西日本特建支店

検索

資料をご希望の方は、フリーダイヤルでご請求ください。
ホームページからお申し込みいただけます。



積水ハウスの賃貸住宅「シャームゾン」総合カタログ



積水ハウス西日本特建支店 実例集「Best Solutions」

第22代文化庁長官

宮田亮平氏
に聞く

新・文化庁誕生

文化・伝統の活用、 そのための方策。

平成29年4月、京都に文化庁の先行移転として「地域文化創成本部」が設置され、同年6月には新たに「文化芸術基本法」が制定。観光やまちづくり、国際交流、福祉、教育、産業その他分野における施策も同法の範囲に取り込まれた。そして本年度中には、いよいよ文化庁が京都へ本格移転する。新・文化庁元年となる今、宮田亮平文化庁長官に、文化庁のこれから、そして社寺への期待を伺った。

廣瀬代表 先日、日本政府後援(文化庁、観光庁、外務省、経済産業省)のもと、鎌倉と東京でユネスコ統計局文化サテライト勘定技術諮問委員会の第1回会議が開催されました。初日のオープニングに長官も参加していたのですが、まず、ご感想をお聞かせください。

宮田長官 鎌倉市の建長寺で開かれたオープニングで、私は「文化庁は文化・経済・観光の三輪車構想を進めており、とりわけ文化がハンドリングを取れば、経済や観光は確実に発展する。」と挨拶で述べました。こ

廣瀬 世界標準の文化の数値化を目指すこの会議の意味は、どのような点にあると思われましたか。

宮田長官 先ほど私は「文化があつて経済がついてくる」と申し上げましたが、このことをもう少し噛み砕くと、「優れた文化芸術には、新たな需要や高い付加価値を生み出し、質の高い経済活動を実現するための力がある」と言えるでしょう。このような「文化芸術が生み出す経済的価値」を数値化する試みとして、文化芸術産業の経済規模、いわゆる文化GDPの測定が各国で行われており、我が国でも、平成27年の時点で約8.8兆円と試算されています。

ただ、この文化GDPの算出に当たっては、どのように定義するか、どのような産業分野を対象に含めるかなど、各国において統一された基準がないことから、国際比較の面での課題が指摘されてきました。このたびのユネスコにおける議論(6頁参照)は、この課題を解決し、文化の経済的な価値を図る国際的な指標



づくりを前に進めるため、重要な機会となると認識しています。

廣瀬 そのように重要なこの会議が、日本で開催されたことの意味をどうお考えでしょうか。また、日本としては、今後、この会議にどのように関わるとでしょうか。

宮田長官 ちょうど昨年、文化芸術政策に関する根本的な理念を定める法律が16年ぶりに改正され、新たに「文化芸術基本法」として成立しました。このタイミングで、ユネスコの専門家

による会合が日本で開催されたことは、非常に意義深いものと考えています。我が国が文化芸術立国を目指す上で、文化が社会にもたらす効果を適切に把握することはきわめて重要と考えており、ユネスコでの国際的な議論にも貢献できるように、積極的に取り組んでいきたいと考えております。

平田理事長 文化政策の転機といえ、現在、2020年に向け、日本が誇る文化や伝統の世界への発信を進められているかと思えます。日本

文化芸術立国を目指し、文化の力を「見える化」して発信。

これは私がいつも言っていることであり、経済があつてその次に観光や文化があるのではなく、文化があつて経済や観光がついてくると考えています。ユネスコ統計局が開始した議論は、文化が果たす役割を「見える化」することにつながります。この「見える化」によって、文化の持つ力が正しく理解されれば、文化政策が担う役割や背負うべき期待もますます大きなものとなるでしょう。これまで以上に力強い文化行政の実現が求められると思うと、私としても、まさに身の引き締まる思いです。

文化の中で、社寺における文化および伝統の魅力とは、どのような点にあるとお考えでしょうか。

宮田長官 おっしゃるとおり、2020年に開催される東京オリンピック・パラリンピック競技大会は、スポーツの祭典であると同時に文化の祭典でもあり、我が国の文化や伝統の価値を広く世界へ発信する大きな機会だと考えています。日本には、諸外国を魅了するさまざまな文化資源がありますが、特に、全国各地で現在まで守り伝えられてきた多様な多彩な文化財は、日本文化全体の豊かさの基盤であり、我が国の伝統の象徴です。中でも、重要文化財に指定されている建造物について言えば、その半数以上が神社仏閣です。こうしたことを考えれば、全国の社寺は、いわば日本の文化や伝統の集積地とも呼べるものであり、全国各地で育まれてきた歴史や信仰に根差した文化の拠点と言えるでしょう。文化庁としては、地域それぞれの文化の魅力が蓄積された社寺にお

社寺の文化・伝統は重要な「日本遺産」。 その息吹も含めて活用を推進する。

いて、ますます力強くその魅力が発信されることを期待しています。

廣瀬 「文化財活用・理解促進戦略プログラム2020」など、文化財を観光資源と位置付けた地域活性化策が進められています。文化財を地域が一体となって整備・活用することで地域が元気になっていくと思われ
ますが、文化庁はどのように取り組んでいるのでしょうか。

宮田長官 文化財は、全国それぞれの地域が持つ歴史の中で、人々の愛着・誇りにより、長い間にわたって守られてきたものです。ところが近年、過疎化や少子高齢化などの社会情勢の著しい変化を背景として、文化財の減失や散逸、担い手不足といった課題が指摘されるようになってきました。同時に、文化財の持つ社会的な価値についても注目が集

まるようになりました。文化財を観光資源として捉え、地域のまちづくりの核に据えることや、まだ価値づけがなされていない地域の文化財を掘り起こすことが、地域の活性化につながるのではないかと

いう議論がなされるようになったのです。このような文化財をめぐる社会の在り方の変化を背景として、平成30年6月、文化財の保存と活用について定める「文化財保護法」が大幅に改正され、新たな仕組みが整備されました。その仕組みの一つとして、たとえば、各市町村が、域内の文化財に関する総合的な計画を策定できることとしました。基礎自治体が音頭をとって、地域の宝である文化財をどのように保存しつつ、地域の活性化につなげるか、プランを定めてもらおうという趣旨です。このような制度を通じて、社会総がかりで文化財を守り、また活かしていくことができるよう、文化庁としても関係者と協力して取り組んでいきたいと思

平田 そのような文化財をめぐる社

会総がかりの取り組みの中で、社寺が担う役割とはどのような点にあるとお考えでしょうか。

宮田長官 新たな制度では、文化財の保存と活用に関する計画を定めるにあたり、市町村が「協議会」を組織できることとしました。文化財の所有者をはじめとする関係者の意見を、計画の策定に反映するため制度です。先ほどもお話にありましたが保有しているわけですから、多くの市町村において、社寺はまさに文化財の所有者として、協議会にかかわる場面が出てくるでしょう。そうした際には、文化財の持つ歴史や重みを知る重要な立場として、ぜひとも、地域社会の議論に積極的に参画いただき、多様な関係者と連携して、観光やまちづくりなどの地域活性化に資する文化財の価値を引き出しつつ、現代のみならず将来の世代に至るまで、人々が文化財の恩恵を享受できるように力を貸していただければと考えています。また、平成27年度から文化庁で認定している「日本遺産」をはじめ、全国各地で地域の文化財を一体的に捉えた観光拠点づくりが進められています。こ



平田 益男
一般社団法人全国寺社観光協会理事、元内閣府特命担当大臣秘書官、文化観光リサーチ株式会社代表



廣瀬 崇之
一般社団法人全日本社寺観光連盟理事、元内閣府特命担当大臣秘書官、文化観光リサーチ株式会社代表

ういった取り組みにおいても、文化財の所有者としての社寺に関わりを持つていただきたいと思っています。
廣瀬 少子高齢化で人口減少が進み、社寺の持っている資産を活用しインバウンドで収益をあげることが不可欠となっていくと考えられているなか、文化財多言語解説整備事業の採択事業では、多くの社寺が対象文化財となっています。近年のインバウンド需要なども鑑み、社寺の魅力海外へ発信することは大変重要だと思われませんが、今後に向けてお考えになっていることなどございま

したら、お聞かせください。

宮田長官 ご存知のとおり、政府全体の目標として、2020年までに訪日外国人数を4000万人とすることを目指しています。外国人の訪日目的について観光庁が行った調査

宮田 亮平
第22代文化庁長官。金属工芸家。第9代東京芸術大学学長(平成17年-28年)新潟県佐渡生まれ。輻型鍍金作家の2代目宮田藍堂の3男。イルカをモチーフとした「シュプリングン」シリーズなどの作品で、「宮田亮平展」(個展)をはじめとして、国内外で多数の展覧会に参加。2012年には第68回日本芸術院賞を受賞。平成28年4月より現職



では、景勝地の観光や、日本の伝統文化の体験にも一定の関心が寄せられていることがわかっています。このため、文化庁としては、この国の豊かな文化財をさらに磨き上げ、効果的に発信していくことが必要と考えており、その一つとして、文化財の多言語解説の整備に取り組むこととしていきます。ただ、社寺が所有する文化財の場合は、単に技巧的な面での卓越性だけでなく、歴史の中での位置づけや、教義に基づく精神性などが重要な要素を持つことが多いため、そうした歴史的・精神的な魅力の中には、外国人が容易に理解できないものもあるでしょう。このため、日本語解説を単に直訳するのではなく、外国人にとっても分かりやすい、魅力的な解説文となるよう、表現などを工夫することが重要と考えています。文化庁が一昨年公表した「文化財に関する国際発信力強化の方策について」では、文化財についての多言語解説を行う際、留意いただくべき点をまとめました

ので、文化庁のウェブサイトでも御覧いただけます。インバウンドのさらなる促進に向けて求められるのは、解説板によるものに加え、VRやARなどの先進的・高次元なものを含め、多種多様な手法を用いた文化財の多言語解説を実施していくことだと考えています。文化庁としても、新たなチャレンジに踏み出す社寺と一緒に、取り組んでまいりますので、多言語化の進め方に困ったときは、遠慮なくご相談ください。
平田 一方で、社寺を含む文化財と共に息づく文化・伝統はこれからは担う日本人にこそ、深く理解してもらいたいものでもあります。この点に関して、お考えをお聞かせください。また具体的に着手されていること、構想などがございましたら併せてお聞かせください。

史や文化を深く学ぶことができるよう、文化庁としても、文化財の確実な継承や鑑賞機会の確保に努めています。特に、先ほどもお話ししました「日本遺産」は、各地の歴史的魅力や特色を通じて我が国の文化・伝統を語る文化財群をストーリーとして捉えるもので、文化財を媒介に人々の営みと歴史を伝えることができる仕組みであると考えています。4年目を迎える平成30年度現在、全国で67件のストーリーが認定されていますが、その中でも社寺は重要な位置を占めています。
文化庁では、この日本遺産をはじめとして、文化財を点としてではなく面として捉えることによって、物質的な意味だけではなく、そこに通底する文化・伝統の息吹を感じてもらうことを意識しながら、文化財の活用を進めています。今後とも、社寺などの文化財を通じて、日本人が日本の文化・伝統への理解を深めることができるよう、一層の努力とともに取り組んでまいります。

文化の数値化を進めて 日本も観光立国へ

ユネスコ文化サテライト勘定
技術諮問委員会第1回会議が日本で初開催



会議にはユネスコ統計研究所、国連統計局、EU統計局、アフリカ統計局のほか、アメリカ、カナダ、フィンランド、メキシコ、スペインの実務担当者たちが集った。日本からは山本幸三衆議院議員(上)や文化庁宮田亮平長官(中)も参加。ホセ・ペッソア委員長(右)や建長寺の村田靖哲総務部長(左)も登壇した

国際的議論の場で 日本への理解も深める

文化産業の経済規模を数値化し、観光立国や地方創生につなげていくとする文化サテライト勘定について、その基準策定を話し合う「ユネスコ文化サテライト勘定技術諮問委員会第1回会議」が、日本で初めて開催された。臨済宗建長寺派大本山巨福山建長寺を舞台にした初日を皮切りに日程は全3日間。世界中から集まった専門家を前に、初日には山本幸三衆議院議員、宮田亮平文化庁長官も出席し、また、文化庁担当者による「新・文化庁」改革の説明、および「文化芸術の経済的・社会的影響の数値評価に向けた調査研究」の概要、日本酒と茶道を例にその文化的側面に着目した経済的価値の試算が紹介された。

この発表に関して、海外の専門家は具体的な試算に着手していることを高く評価し、「無形の文化に着目したことはきわめて興味深い」「文化に着目した経済的価値という視点はなかった」といった声も挙がった。また、初日の会場が建長寺である

ことを生かし、精進料理と坐禅の体験を実施。ほかにも全日程の中で書道、茶道といった日本文化の体験も行われ、各国からの出席者に日本文化の魅力を深く理解してもらう機会が提供された。「文化サテライト勘定」については、日本でも文化庁において調査研究が始まっている。そのなかで今回、ユネスコの国際会議を日本に誘致することで、文化の経済活動定量化への国際的なルール策定議論に貢献できた意義は大きい。今後は中長期の国益確保を視野に、文化をはじめ各分野での世界ルール策定にいかに関与・貢献できるかの議論が、政府内において一層進展することが期待される。加えて寺院の伝統・文化だけでなくお茶や日本酒など生活の中の文化まで紹介できたことを考えると、国際コミュニケーションにおける今後の議論において、日本文化の特性を踏まえた検討もされやすくなるのではないかと見られる。

今回の会議は、文化

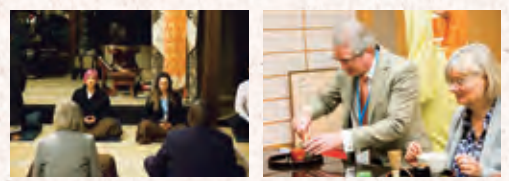


永田町の衆議院多目的ホールにて歓迎レセプションを開催。日本側を代表して山本幸三衆議院議員、村田文化庁次長が挨拶。ユネスコ側を代表してペッソア委員長よりお礼の挨拶があった。日本酒造組合中央会提供による鏡開きでは田端観光庁長官らも参列し、東急グループ代表・野本弘文氏の発声での乾杯後は歓談の場となり、大いに盛り上がった



日程

- 1日目(平成 30年 10月 31日)
会場：臨済宗建長寺派大本山巨福山建長寺
・オープニングセッション
・セッション(会議)
・文化体験
- 2日目(11月 1日)
会場：衆議院国際会議室
・セッション(会議)
・文化体験
・歓迎レセプション
- 3日目(11月 2日)
会場：衆議院国際会議室
・セッション(会議)
・文化体験(久能山東照宮)



会期中はさまざまな文化体験が用意された。初日は坐禅、精進料理を体験。2日目は株式会社おけいこジャパンの提供により、日本政府観光局(JNTO) 特別顧問のデービッド・アトキンソン氏(右)も加わり、着物の着付、習字、お茶のお点前を体験した



3日目は全セッション終了後に静岡県の久能山東照宮を視察。富士山を眺めながら、久能山東照宮へ到着後、全国国宝重要文化財所有者連盟理事長でもある落合倫洲宮司が境内を英語で解説した

サテライト勘定技術諮問委員である原忠之博士と、東急、APAMAN、ぐるなび、文化観光リサーチ、全日本社寺観光連盟による支援で実現できており、国連組織の正式会合を日本の民間企業の活力とスピード感で、しかも政府側の事前予算措置なしに短期間のうちに実現した点、日本文化の重要性を民間企業群がサポートしている事を誇示できた点なども、大きな意義があったようだ。

文化サテライト勘定は 地域の未来に直結する



セントラルフロリダ大学准教授
ユネスコ文化サテライト勘定技術諮問委員
原 忠之

GDPに変わる世界基準の 新たなものさし

GDP は国の経済規模をはかるものさしとして1930年代に誕生したのですが、それから80年を経過して、経済構造変化に対応し新たな経済活動を測定しようと、国連統計局を中心にいくつかのサテライト勘定を推し進めています。文化もその一つです。以前は存在しなかったか、規模が小さかったためにその他扱ったような産業活動が発展を遂げている現在、それらがいったいどの産業活動内に隠れているのかを、地球上空を周回しているサテライト(衛星)のイメージで、世界規模の測定を行い、算出します。

実は文化の経済活動を測定しようという文化サテライト勘定の動きは、少し前からありました。しかしその議案が出るたびに、文化に値札をつけるとはけしからんという反対にあり、実際の測定基準策定の動きはユネスコ内でも停滞。このような状況の中で、文化観光リサーチ社が代表を務めるユネスコ文化サテライト勘定技術諮問委員会運営委員会が結成され、日本での開催誘致に成功したことは、とても大きな成果だと思います。欧米主導のサテライト勘定世界標準策定作業を牽引してきた先進諸国の中に、唯一のアジア諸国として参入することができたのですから。また、今後に向けて文化庁が世界を意識して日本の文化の経済活動測定作業や発想を発信していくという構図が出来たことも、中長期の国益確保という点で大きな意義があります。

地方創生が ここから加速する

ところで、日本国内の地方創生を盛り上げるには、大都市から地方へインバウンド客に周回してもらい、宿泊、飲食、ユニークな体験や感動をSNSで発信してもらうことも重要です。そこでの費用対効果を考えると、既存の地方資源をインバウンド向け観光資源として活用することで初期投資を抑えることが最も効率的です。

地方には伝統と歴史を継承する人々の生活があり、季節の伝統行事、生活習慣、伝説などに溢れています。また、地元の方が畏敬する文化の中心的存在として神社仏閣が日本中いたる所に数百年、千年の歴史を継承しており、訪日客はそれを感じることができます。その経済規模を数値化することは、観光関連施設の売上げを通してより多くのお金を地方経済にまわすことにつながります。要するに、観光立国実現のための地方創生の起爆剤として文化資源を戦略的に有効利用するビジネスモデルを構築できる、それが文化サテライト勘定の効用なのです。文化資源や文化活動が数値で測定できることは、他産業同様の枠組みで投資効果を可視化できることを意味します。インバウンド客の観光消費で地域住民の生活の質向上を目指す地方創生・観光立国に有益な数値化手法です。

新

NEW WIND

風

寺社に関わる新たな取り組みや商品などを紹介します。今回は若い女性の間で話題になっている名刺のカフェメニュー、神社にある意外なものの商品化、そして外国人観光客に向けた新たな取り組みです。



上/喫茶「れいほう」は、琵琶湖を見下ろす高台にあり、眺望の良さでも知られる。右/手前より時計回りにカフェラテ、抹茶ラテ、秋限定のキャラメルラテ。スチームミルクの口当たりも実に繊細

NEWS 1

山内拝観の休憩で、仏との新たなつながりに 比叡山延暦寺のカフェで 「梵字ラテ」が話題沸騰

■天台宗総本山比叡山延暦寺にある延暦寺会館の喫茶「れいほう」では、平成29年から提供を始めた「梵字ラテ」を求め、若い女性を中心に来館者が増えている。もともと比叡山のおいしい水で淹れたコーヒーは提供していたが、境内の奥まった場所にある延暦寺会館へより多くの人に足を運んでもらうためにも「もつとお寺のカフェらしいものを提供しなければ」と考案された。また、若い世代にも仏教を身近に感じてもらいたい、という思いも考案の理由。

ラテはカフェラテ、抹茶ラテに加え、期間限定でイチゴラテやキャラメルラテなども登場する。ただ梵字が描かれているだけではここまで人気が出なかったかもしれないが、最大の理由は梵字が客の守り本尊であること。注文時に客の干支を聞き、その守り本尊の梵字をラテアートで表現。梵字を美しく描くためにより試行錯誤をしたそうだが、その甲斐あって、見事な完成度が評判を呼んだ。

「近年は若年層のお寺離れと言われますが、ラテを飲んでいただくことが、仏教との接点を持つ一助になればと思っています」と考案者の延暦寺会館館長、今出川行戒師。守り本尊という存在を知れば、自ずとその姿に興味湧き、諸仏を観ることにつながっていくはず。ほつとひと息の時間が、新たな仏縁のきっかけにもなる。SNSで大人気となっている点も、延暦寺会館を訪れる若い人が増えている大きな理由だろう。

これは飲む布教です

やるからには本気で、とコーヒー豆や抹茶にこだわりました。ホームページや山内のポスターで告知する程度でしたが、SNSで拡散されたことがきっかけでお客様が増え、また取材も増えました。梵字ラテは見て飲んでお寺との繋がりを感じていただく「飲む布教」だと思っております。まさにお寺でやるからこそ意義のある飲み物でしょう。(今出川行戒師)



天台宗総本山
比叡山延暦寺
延暦寺会館
〒520-0116
滋賀県大津市坂本本町
4220 比叡山延暦寺内
TEL: 077-579-4180
http://syukubo.jp/



明神鳥居、神明鳥居、両部鳥居、山王鳥居、千本鳥居の5種が発売中。それぞれに鳥居の名称プレートもついている

■空前の寺社ブームを受けて、大人から子供まで楽しめるカプセル玩具には仏像など寺社のコンテンツが登場している。そこに平成30年11月、「これもコンテンツになるのか」という新たな商品が登場した。

さまざまなカプセル玩具を企画しているエポック社から販売されたのは、全5種の「鳥居コレクション」。本物そっくりの鳥居が手のひらサイズで再現され、インテリアにも最適。開発のきっかけは、担当の渋谷氏が旅先で寺社を巡っている際に、鳥居にどんな意味があるのかと興味を持ったことだった。企画するに当たってはかなりの数の鳥居を見て回り、「特徴がそれぞれ異なり、また神社によって材質も形状も違うことに、非常に奥深い魅力を感じました」とのこと。最近では日本人だけでなく外国人観光客も鳥居をSNSで投稿することが多いため、幅広い客層に支

持されると感じ、商品開発を進めた。今後のシリーズ化については未定だが、反響を見ながら企画を進め、鳥居以外にも再現して小さな神社をつくることも目標にしているという。それが実現し、拝殿や狛犬などもカプセル玩具になれば、参拝客が自分好みの神社をつくるなど、楽しみも広がる。そうなれば神社ファンのさらなる拡大も期待できそうだ。

NEWS 2

神域の象徴「鳥居」が玩具に カプセルコレクションに リアルな鳥居が新登場!

株式会社エポック社
〒111-8618
東京都台東区駒形 2-2-2
TEL: 029-862-5789
(エポック社お客様サービスセンター)
https://epoch.jp/

NEWS 3

世界仏教徒会議で話題に 和宗仏教青年連盟が 英語で絵解きを実施

■平成30年11月に公益財団法人全日本仏教協会の財団創立60周年記念事業の一環で、「第29回WBF世界仏教徒会議・第20回WBFY世界仏教徒青年会議・第11回WBU世界仏教徒大会」が開催された。会場となった曹洞宗大本山総持寺にて世界平和法要とシンポジウム、さらにはさまざまな仏教イベントも同時開催された。なかでも注目を浴びていたのが、英語による「聖徳太子絵伝」の絵解き実演。



今回の絵解きは、山岡住職と四天王寺の僧侶、アスアヘアラム氏の計7名で行った

きのあとに同じ内容を英語で読み上げる手法で、多くの仏教関係者が興味深く聞き入っていた。今や日本中の寺社に多くの外国人観光客が訪れており、彼らは寺社を通してより深く日本の文化や伝統を見ようとしている。いずれは絵解きなどに興味を持つ人も増えてくること予想され、その時に英語で説明ができる、寺社に息づく文化を深く理解してもらえないだろうか。

絵解きをする大阪・愛染堂勝曼院の山岡武明住職とハーバード大学大学院生のマヌエル・アスアヘアラム氏。四天王寺の絵堂で行われているもののショーバージョンを実演した

特集

雑誌の誌面から、寺社が
発信すべき内容を知る

寺社の

人気雑誌の
編集長に聞く！

魅力

とは？



現在は空前の御朱印ブームと言われているが、歴史を振り返ってみると、江戸時代の寺社参詣は「名所図会」などが、庶民を寺社へと駆り立てた。これらは現代で言えば雑誌のようなもの。つまり雑誌で寺社がどう紹介されているかを知れば、より多くの人を惹きつけるポイントが見えてくるのではないだろうか。

多種多様な切り口がヒント。いま発信すべき魅力とは？

寺社ブームは、数年に一度必ずやってきている。最近でも寺社からの絶景御朱印恋愛祈願、フォトジェニック寺社と、数々の切り口で紹介され、そのたびにブームが起こってきた。そして「寺社マニア」と呼ばれる人たちも生み出してきた。

これらの仕掛け人は、多くの場合雑誌である。同メディアでも、しっかり読み込めて情報の保存性があるのは、テレビよりも雑誌の方に一日の長があるようだ。では、雑誌のコンテンツ制作側は、寺社のどんなところに魅力を感じ、企画しているのだろうか。今回は寺社を特集などで扱う雑誌の編集長に、寺社への思いと今後への期待を聞いた。そこにはさまざまな手段で寺社の情報を発信する際の、大きなヒントが隠れているに違いない。

【 寺社の一番の魅力とは？ 】

4

「旅の手帖」

寺社は鉄板の人気観光地。旅先の土地を知るにはまず寺社に行くべき



平成31年1月号は「門前町を歩く“先年の古社寺”」を特集

■観光したいスポットのアンケートをとると、寺社、温泉が必ず上位にきます。旅行する際、私たちはまずどの“土地”に行くかを考えますが、訪れたい土地にどのような寺社があるかは、とても重要なことだと思います。山や海、草木に水と、主に自然が信仰されてきた場所にあるのが神社。集落があり、近隣の人たちの集会場としての役割も果たしてきたのがお寺。寺社はその土地ならではの形を体現した場所として、土地の魅力を理解できる一番のスポットではないでしょうか。

その土地のあり方、考え方を考える一番のガイドブックが寺社の存在



「旅の手帖」編集長 五十嵐匡一さん



1977年に弘済出版社(現・交通新聞社)が創刊した旅の情報誌。キャッチコピーは「ニッポン文化応援マガジン」

3

「Discover Japan」

コト消費が拡大する今 寺社は体験できる場所として価値がある



印象的な写真で寺社を表現する手法も定評がある

■“モノ消費”から“コト消費”へと時代が変化する中、「体験ができる場所」としての寺社の価値は、とても高いと感じます。先日三井寺の宿坊に宿泊し、腕輪念珠作りを体験しましたが、自ら意味を考えながら珠を貫く時間は本当に豊かでした。最近、アメリカを中心に「マインドフルネス」という概念が話題となっていますが、本来、日本では坐禅などを通して1200年以上も前からやってきたこと。見つめ直すと、寺社の文化にはとても現代的な魅力があると気付きます。

寺社の文化を掘り起こすと 現代的な魅力が見えてくる



「Discover Japan」編集長 高橋俊宏さん



「ニッポンの魅力、再発見。」をコンセプトに2008年にエイ出版より創刊。今年、誌名と同じ新会社を設立した

撮影協力 SORA PIZZA / 東京都渋谷区神宮前 2-19-5

2

「芸術新潮」

芸術を育て、守り、残す 特別な場所だからこそ 感じられる豊かさ



創刊800号記念特大号「神社100選」は大ヒットを記録した

■拝む間に仏像に出会い、拝観しながら障壁画や建築を楽しむ。丸ごと文化を感じられる場所であることが、寺社の魅力ではないでしょうか。同時に、文化教育の場であることも重要です。例えば、唐招提寺に壮大な海の障壁画を残した日本画家に東山魁夷という人がいます。彼のような現代画家にあれほどの大きな作品、かつ自由度の高い作品を依頼できるのは寺社くらい。文化を作る、守る、残す。そうした寺社の寛大こそ、今日までの日本の美術・芸術を支えてきたのです。

寺社ほどの日本美術は他で作れない 丸ごと文化を体感してほしい



「芸術新潮」編集長 吉田晃子さん



1950年に新潮社より創刊した月刊誌。国内外にかかわらず、幅広く美術や芸術を取り上げる。ガイドブックとしても人気

1

「和楽」

特異な信仰の姿がもたらした日本独自の 空気感を体感できる



平成30年12月号では国東半島、阿蘇山の神仏を特集した

■「日本の空気感を体感できる場所」、それが寺社の一番の魅力でしょう。都市化が進み、日本古来の文化を体験できる場所が少なくなっています。寺社は、その最後の砦です。特に重要なのは、「信仰の現場を見られる最高の場所」であること。海外では、日本は無信教だと見られていますが、私は究極の多神教だと理解しています。神道では草木にも神が宿ると考えられ、仏教においてもこれだけ多くの宗派が集まる場所はない。その多様さこそ日本文化だと、寺社は教えてくれます。

日本の多様さを体感できる 寺社は日本文化の最後の砦



「和楽」編集長 高木史郎さん



小学館より定期購読者限定雑誌として2001年創刊(現在は書店購入可)。「日本文化の入り口」がキャッチコピー

【寺社に今後期待する点は？】

3

■最近では体験コンテンツに力を入れる寺社も増えていますが、もっと増えてほしいと思います。例えばアメリカでは今、「WELL Building Standard」という、健康的なオフィスの基準を定める制度ができています。そこにはマインドフルネスも含まれている。日本でも社屋に瞑想ルームを設けるなど、その基準をクリアしようと努力する企業が増えていますが、それよりも、近くのお寺と提携して、社員が昼休みなどを使って坐禅ができるように整えたほうがいい。そうした他との連携で、自分たち本来の強みを活かしてほしいですね。

座禅こそ「マインドフルネス」企業との提携でビジネスが拡大する

「Discover Japan」

企業や媒体との
コラボレーションで
新たなビジネスを



高橋俊宏編集長



寺社の機能を、周辺の地域や企業と共有して活性化へ

4

■観光地として寺社を訪れる人は、必ずしも「信仰心」で行くわけではありません。歴史的建造物として魅力を感じた寺社について知りたいと足を運ぶ人も少なくないのです。地方の小さな寺社でも、驚くような立派な建物があるところも少なくありません。そんなとき、専門的ではなくてもちょっとした説明、話しかけがあると、より深い理解へとつながるのではないかと思います。同時に、例えば神明明神がアニメとコラボしているように、時代の流れにうまく対応しながら、若い世代に向けて寺社をオープンにしていくことも重要ではないでしょうか。

神話や宗教的な経緯だけでなく、いろいろな角度から魅力を伝えたい

「旅の手帖」

観光地としての寺社は
「知る」ことの入口
小さな話しかけの実践を



五十嵐匡一編集長



人気マンガとのコラボで若い人に人気の神社も増えている

1

■日本文化の“最後の砦”として、3つの役割を期待しています。一つ目は、文化の発信拠点となること。以前行われた太宰府天満宮による現代アートの展示や、仁和寺が今年特別拝観として行った「金堂裏堂 五大明王壁画」公開のように、新たなものを発信することも、持っている美を掘り起こして見せることも、とても重要です。二つ目は広義での幼児教育。保育園を寺社が運営するだけでなく、境内を解放し、子供たちの遊び場にするのも面白い。そして三つ目は、日本の植生の最後の守り手となることです。都会の中の森は、今後大きな資産になるはずですよ。

たくさんの方々の未来を創り出す
寺社はこれからもそんな場所

「和楽」

「文化」「子供」「森」
その3つの守り手に
寺社になってほしい



高木史郎編集長



寺社はいつの時代も「人が集う場」。新たな賑わいを創り出してほしい

2

■寺社が所有している美術品には、公開自体が難しい貴重な文化財となっているものも珍しくありません。そんな中、京都・天球院の方丈障壁画の複製品を制作した「綴プロジェクト」には、新たな可能性を感じました。原画は保護のために国立博物館に寄託され、その複製品を天球院に飾る。絵師たちが描いたのは天球院のための障壁画ですから、保存ばかりに意識が向けられると、美術品本来の素晴らしさ、つまりあるべき場所で見られる美しさが失われてしまいます。今後、それらをどう継承していくのか、新たな試みにも期待したいです。

「綴プロジェクト」に感じた
保存と伝承の新たな可能性

「芸術新潮」

文化財を守りながら
いかに伝承していくか
新たな展示方法に期待



吉田晃子編集長



絵画から庭園まで、寺社にある多様な「美」をその場でどう見せるかが課題

Q2 今後期待する点は？

今後の寺社観光を考える。

寺社がこれからの情報発信を考えるときに必ず知っておきたいのは「消費者が何を求めるか」。そこを理解し、的確な情報で多くの人に寺社の文化を理解してもらおうとこそ、これから必要なことではないだろうか。データに基づく消費者の志向や動向を、専門家に聞いた。

河野 まゆ子



株式会社JTB総合研究所 主席研究員。東京大学文学部美術史学専攻卒業後、旅行会社勤務、筑波大学大学院修士課程を経て、平成18年より現職。精緻な調査データに基づき、地域資源を活用した観光振興に係わる戦略づくりを支援する地域コンサルタント。文化財活用や観光危機管理体制強化等のテーマを通じ、地域や施設の「底力」の向上を重視した商品戦略、プロモーション戦略の策定を行うほか、コンテンツ開発などの具体施策の推進を手がける。文化資源学会所属、世界遺産学修士。

では、お祓いやご祈祷経験者が35%、御朱印経験者も25%に達しています。が、写経・坐禅など時間の掛かる体験に関しては1割強、宿坊経験者は9%と、共に高くありません。ちなみに寺社で希望する体験(下図参照)では、お祓いやご祈祷は旅先よりも生活圏の寺社で体験したい人の割合が全体的に多く見られます。一方旅先では、精進料理や宿坊、特別拝観や御朱印など、その寺社ならではの特別感のある体験が人気。興味深かったのは、日常的な儀礼・作法を一人で体験したい人が多かった反面、特別拝観など「深く知って楽しむ」とは親しい関係の配偶者などと二人で、食に関する気軽な体験は友人と、というように体験の専門性や目的性の高さ、レジャー要素の強さなどで同行者が変化することでした。

観光的目的地として寺社を訪れる人は、宗教施設を目指してきているわけではなく、文化に触れることを目的としているのです。これは我々日本人がヨーロッパ旅行でゴシック教会に行くとき、キリスト教を知るために行くのではないことと同じです。私たちの現代生活では、複数の神様や仏様が今も自然に囲まれて暮らしている。端的に言う「癒やし」や「自分をチューニングする場」としての機能、そして和 문화の再発見です。例えば宿泊のシーンをみると、いまの20代の若者には「あえて和室を選択する」という傾向もあります。住環境が昔と違い、床の間がある畳の部屋を知らずに育った世代にとって、それだけでも旅を彩る異空間となります。このような「和 문화への回帰」は、観光における若年層の動きのなかでも顕著に現れています。寺社においても、同じことが言えると考えています。家族全員での墓参りが減り、神社の境内や隣接する公園が遊び場ではなくなり、また寺社が「日常的な場所」ではない人にとっては、寺社は非日常の場所として機能し、そこで日常のさまざまなことを払い落とし、明日からのパワーを得るのです。そのときに「寺社でなければ味わえない清廉さ」がほかの観光スポットとは異なる独自性となり、固有の来訪目的となるのでは

寺社に求めることの変化 日本人であることの真価

いま、旅行者は寺社に何を求めているのか。端的に言う「癒やし」や「自分をチューニングする場」としての機能、そして和 문화の再発見です。例えば宿泊のシーンをみると、いまの20代の若者には「あえて和室を選択する」という傾向もあります。住環境が昔と違い、床の間がある畳の部屋を知らずに育った世代にとって、それだけでも旅を彩る異空間となります。このような「和 문화への回帰」は、観光における若年層の動きのなかでも顕著に現れています。寺社においても、同じことが言えると考えています。家族全員での墓参りが減り、神社の境内や隣接する公園が遊び場ではなくなり、また寺社が「日常的な場所」ではない人にとっては、寺社は非日常の場所として機能し、そこで日常のさまざまなことを払い落とし、明日からのパワーを得るのです。そのときに「寺社でなければ味わえない清廉さ」がほかの観光スポットとは異なる独自性となり、固有の来訪目的となるのでは

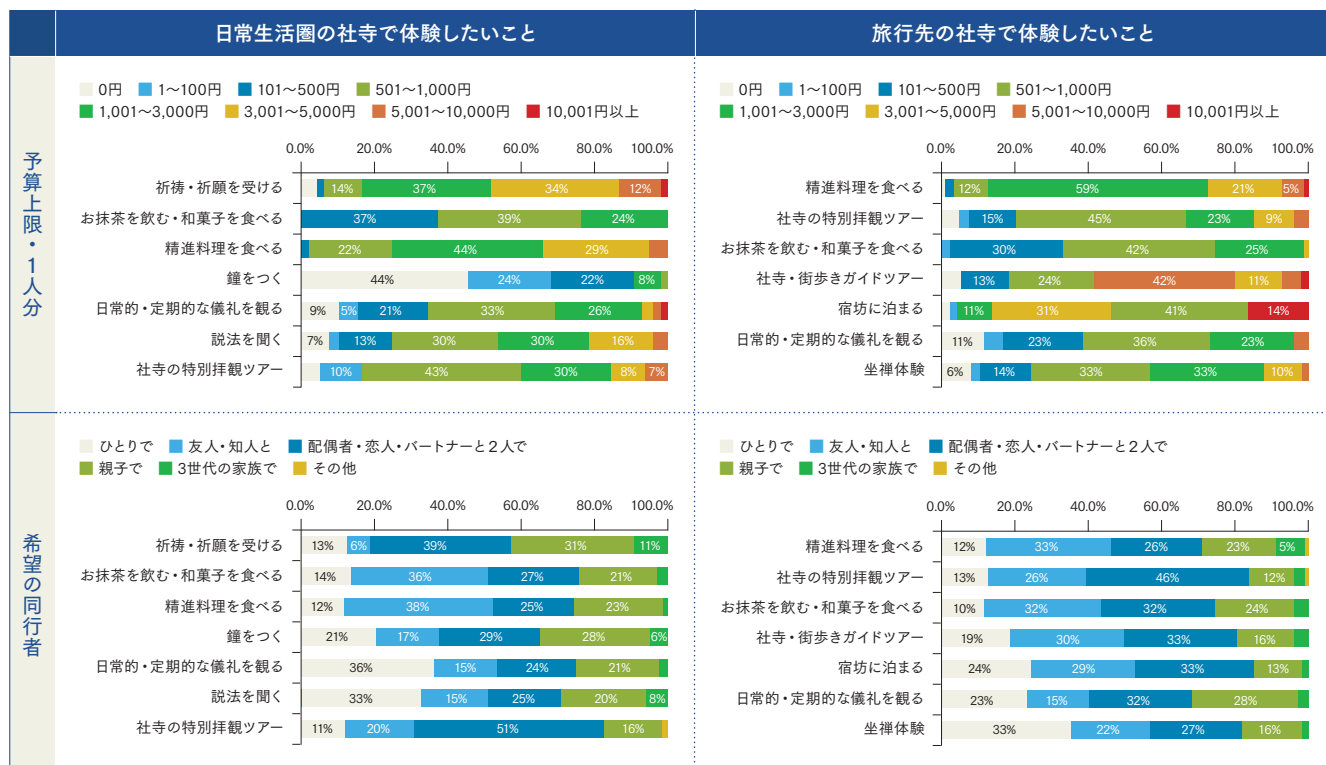
ないでしょうか。現代社会では、ひとりひとりが自分ならではの幸せや満足の形を探しています。その中で寺社には、物質的ではない、本質的で畏怖の対象である何かがあり、参拝することでその何かと自分がつながりを持ち、参拝したときの気分がどこか心地よい。つまり現代の寺社は、参拝者が「自分に戻れる場」として機能しているように思えます。また、訪日外国人が今後はさらに増えるの見込まれているなかで、「グローバル」という物事の考え方も変化が生まれています。10年前はグローバルという英語を話せるようになる、国際的に競争できる人材になる、国際交流を見据えた仕事を推進する、という機運がありました。しかし今、外国人は否応なしに来日。その状況下で2020年には東京オリンピック・パラリンピックが開催されることになり、「世界の中にある日本って何？」ということを我々日本人自身が突きつけられるようになってきました。このような潮流においてのグローバルとは、多言語化を推進することでも欧米のお作法適合型でもなく、日本で培われてきた文化や考え、伝統を国際社会に向

かつて表現することが変わることによって変わってきています。この「日本」で培われてきた文化の象徴のひとつが寺社であると言えます。外国人旅行者が寺社を観光するだけでなく、日本人自身が寺社を訪れることを通じて、日本人の伝統やいまに伝わる考え方の本質に触れ、日本文化や日本人というものを改めて客観的に再認識するための道しるべにもなっているのではないのでしょうか。

寺社の価値を再度理解し 発信方法に工夫を

JTB総合研究所が平成29年に行った調査によると、社寺について「参拝方法を知らない」と行きづらいうと思う人が3割以上いました。昨今は寺社での参拝マナーに関するネガティブな報道も見えますが、消費者は概ね真面目だと言えそうです。また、5年以内の寺社での体験につい

【参考】希望する社寺関連体験の予算上限・同行者 出典/「社寺に関する消費者動向調査」JTB総合研究所(平成27年)



調査対象者/20~69歳一般男女、過去5年以内にお寺や神社を訪れたことがある人。サンプルサイズ/合計600s、首都圏・京阪神各300s ※性×年代別割り付け(要件等)。調査エリア/首都圏(1都3県全域)、関西圏(2府4県)。調査手法/インターネット調査



真言宗大宝山
権現院千光寺

住職

多田 真祥

ただ
しんしょう



しちるいどうてんけい
平成 25(2013) 年のご本尊ご開帳を記念して道釈画家の七類堂天谿画伯に描いてもらった持佛堂内愛染明王襖絵前にて。毎年春と秋に計 4 回、特別公開を実施している

■芸予諸島への拠点。そして海運業で栄えてきた広島県尾道市。数々の日本映画の舞台として昭和の頃から多くの観光客が訪れてきたが、近年は平成 27 年の「尾道水道が紡いだ中世からの箱庭的都市」、平成 28 年の「日本最大の海賊の本拠地・芸予諸島―よみがえる村上海賊 Murakami KAZOKU」の記憶―と 2 年続けて日本遺産に認定され、観光需要がさらに高まっている。

そんな海辺の町を陰ながら支えてきたのが、ほかならぬ千光寺である。地元尾道の人たちの信仰の拠り所としてだけでなく、まちづくりでも重要なポジションにあり、常に町の発展と共に歩んできた。寺社と地域振興の好例ともいえる千光寺は、尾道の振興にこれからさらにどう寄与していくのか。多田真祥住職に、寺が果たしていく役割、そして町と寺社の活性化について、考えを伺った。

古き良き日本を 感じる尾道の町で、 素晴らしい景観と 共に仏縁と出合う。

瀬戸内の港町・ 観光客の仏道への入口に

「千光寺は大同元(806)年の開基以来、尾道の町を見守り続けてきました。まさに町の守護的な存在ですが、その魅力をお聞かせください。」
当寺は素晴らしい景観の中にあります。昔は辺鄙なところでしたが、お参りの方も少なくなかったのですが、現在はロープウェイや、

車では公園の入口までドライブウェイで登れます。このようにインフラが整備され、また千光寺公園があることにより日本だけでなく世界中から多くの方が千光寺へ来られるようになりました。

尾道は昔から旅人を温かく迎えられる町の人の人懐っこさ、それに港町独特のオーブんな雰囲気があり、これも大きな魅力です。昨年はJRの観光列車「瑞風」の尾道駅停車、豪

華客船「がんつう」の寄港がありましたし、NPO法人による空き家再生などで新しい住民も増えています。

当山に来られた方に聞いてみると、懐かしさやレトロな空気といったイメージを尾道に持つておられるようです。古き良き日本の姿を求めて尾道を訪れる、その日程の中に千光寺を入れていただいていることは大変ありがたいと感じています。千光寺には最近特に若い方が多く来られる



本尊に向かって左には大聖歡喜天像が、愛染明王と異なるタッチで描かれている。象の背中は、七類堂画伯が境内の名所・鼓岩から着想したそう

ようになりましたが、見よう見まねで仏様に手を合わせている姿をたびたび目にします。お線香やろうそくを立てたことがない若い方達が一生懸命、説明板で作法を見たり、お寺の手伝いの者に聞いたりしながらお参りの所作をしていらつしやるのです。つまり千光寺は、神仏に手を合わせたことのない若い方が仏道に出合うと言いますか、お参りをするきつかけを作っている場所ではないでしょうか。

昨今の御朱印ブームで、最近若い女性の方が御朱印帳を持ってお参りされます。お参りをしなくても御朱印は欲しいという方もおられると思いますが、そのような方には「書いている間にお参りに行ってください」とお声がけしています。御朱印待ちの間にちょっとお参りをして、そこで心に感じるものがあれば、次のお寺ではお参りをしてから御朱印をいただこう、という参拝の仕方につながっていくと思います。

観光で尾道を訪れた若い方が千光寺へお参りし、そこで観光が信仰に変わるといふこともあるのではないのでしょうか。御朱印ブームというのは仏縁を結ぶにはなかなか良い機会だと思っていますので、お寺も

家で名誉市民の三木半衛門翁が發起人となり、檀家や有志の奉仕と巨額の篤志金で共楽園が完成しました。明治36(1903)年にはこれを尾道市に寄附し、その後、市によって年々開発・整備が行われて千光寺公園と改称され、現在に至っています。公園ができたことで、参拝者も増えたようです。

現在は、千光寺公園がトリップアドバイザーという世界最大の旅行サイトの「行ってよかった日本の展望スポット2014」で第5位になり、海外からも多くの方が訪れるようになりしました。そこで当寺では、外国からのお客様をどうおもてなしすべきかを今後の課題と考えています。

また最近では、経済優先主義ではなく内面の豊かさを求める人も増えています。その影響からか、最近の



ロープウェイで山頂駅へ向かうときに玉の岩が見える。かつてはこの岩山に光る宝玉があり、海からもその輝きが見えたという

しつかり御朱印を薦めています。

国内外から訪れる参拝者に 仏縁を結んでもらう

観光と一体となることで、それが仏の教えを広めることにもつながるといふことですね。千光寺は古くから尾道の町と関わりがとて深く、尾道振興の立役者の存在です。現在の尾道観光の中で、千光寺はどのような立ち位置なのでしょう。

当山の裏山一帯は千光寺公園で、尾道を代表する観光スポットとなっています。尾道は昔から海運で栄えていました。海運業で財を成した旦那衆が「尾道にはこんな素晴らしい景観があるのだから、市民の憩いの場にしたらどうか」と当時の住職に相談し、明治27(1894)年、千光寺檀



若い人達を見てみると、本当に熱心に拝んでくれている気がします。その姿を頼もしく思うと共に、彼らに対してどうやって仏縁を結んでもらうか、考えていかなければなりません。例えば毎月28日に護摩法要をしています。そこへ来ていただけるといふような仕組み作りも必要です。お参りして御朱印を受けて帰るといふ行程の中に、体験を組み込むことも検討しています。坐禅や法話をしたり、写経スペースを設けたりも、今後は考えていきたいと思っています。段階を経て、お寺と深い仏縁を結んでいく仕組み作りです。しかし写経や写仏をするにも、なかなか狭いお寺です。場所がなく、現状ではまだまだうまくいっていません。最近の若い方は、千光寺で何が出来るのかをしつかり調べて来られます。そのためにもできることはきちんと整備して、発信しなければなりません。

宗派を超えたつながりや 行政とも連携していく

若い人達に仏縁を結んでもらうためにも、千光寺にあるコンテンツを明確にするということですね。平成25(2013)年には、七類堂天

観光が信仰へ変わる場所。
その意識を忘れず
体験も提供していく。



千光寺公園全景。中心に見えるのが尾道市立美術館で、写真右側は春になると桜が咲き誇る尾道随一の名所。左側に千光寺はある



尾道は地図を見ながら歩いても迷うほど、細い路地が続く町。市街地から千光寺までは「千光寺道」が延びている(右)。環境省「日本の音風景百選」に音色が選ばれている鐘楼。鐘の音はテレビやラジオでの「除夜の鐘」の音としても親しまれている(左)



岩の頂上を石で叩くとポンポン音がすることから「ポンポン岩」とも呼ばれる鼓岩。尾道の観光名所として知られる



くさり山(石鎚山)修行場前にて、多田真祥住職と多田義信前住職。くさり山の頂上には千光寺の鎮守石鎚蔵王権現が祀られている。鎮修業の達成感とそこからの素晴らしい眺めを体感してもらいたいと、前住職が鎮修行場を復興した



谿画伯が客殿に「愛染明王」「大聖歡喜天」という襖絵を完成されました。その特別公開が毎年実施されていますが、ほかにも、町と一体となって、新たな参拝者に来てもらう取り組みをされていると聞いています。

七類堂天谿画伯の襖絵は内拝していただくだけでなく、より多くの方が親しめる方法も検討しています。先生に新たに下絵を描いていただき、その絵に参拝者が色を付け、お預かりして当山で祈禱し、後日お渡しするようなことも始められるといひです。写経についてもそれを巾着袋に入れてお守りにするようなこともやってみたいと思っています。

尾道は、路地にたくさんのお寺があります。その中で御朱印に対応しているお寺同志が宗派を超えて集まり、「尾道七佛めぐり」を平成13(2001)年から始めました。これが大変評判となっており、年々参拝される方が増えている状況です。これは7カ寺の住職、副住職が宗派を超えて集まり、意識を共にすることで継続できています。2年前からは7カ寺の副住職によって「お坊さんと巡る七佛めぐり」というイベントもスタートさせました。年に数回、事前

申込で集まった方々と副住職が7カ寺を一緒に歩いてお参りをするのです。道中はハンドマイクで町やお寺の説明をし、お寺を訪れた際には一緒にお勤めもします。この取り組みも非常に評判がよく、毎回予約でいっぱい。興味深いのは、当初の予定では都会の若い女性をターゲットにしていたのですが、いざ始めてみると、地元広島県の方が大勢参加されていたこと。嬉しい誤算ですね。ですから今後は、地元の方をまずは大事にして、広島以外の方からのお参りがもっと増えたらと願っています。

それから、広島県と尾道市が協働して「こいのわプロジェクト」という婚活イベントを県内各所で開催しているのですが、尾道市は千光寺公園が舞台となりました。そこで当寺では、愛染明王にご縁を結んでもらうというご協力をしたところ、15組のカップルが誕生したと後日報告を受けました。このような形で愛染明王の存在を知ってもらい、良いお陰を受けていただけると嬉しいのです。

町や人とのご縁を意識し地域の 一部として発展を千光寺だけで活動するのは

お寺も尾道の観光資源。 町と寺が共に発展する 道を考えていく。



向島への連絡線から尾道市街を眺める。千光寺は尾道のどこから見える場所にあり、町の人々に親しまれてきた



多くの観光客が訪れる尾道。穏やかな尾道水道とノスタルジックな街並みが、人々を惹きつけている

なく、周りと協力し合うことで仏縁を広げていくことですね。最後に、これからのまちづくりや仏縁づくりについてのお考えをお聞かせください。

境内に伝説の巨岩「玉の岩」があります。その昔、岩山に光る宝玉があり、海上を夜間に航行する船の灯台の役目をしていたとの伝説です。この光る玉から、寺が千年も長く、玉が千里も遠く光るよう千光寺と名前が付いたそうです。尾道の港を備後国玉の浦と呼んでいたのも、昔から千光寺は尾道の町や港と深いつながりがあったからなのです。だからこそこれからは尾道の数ある観光資源のひとつとして、当山の進むべき道を考えていきたいと思っています。

平成17(2005)年には、多田義信前住職の発願で、かつて修行場だった石鎚山鎮修行場を復興しました。晴れた日には四国の霊峰石鎚山が見えます。終戦前に鎮を供出したままになっていましたが、岩に鎖を取り付け、60年ぶりに修行できるようになりました。観光で当山を訪れ、この鎮修行を大変喜んでくださる方も多く、お寺の歴史を蘇らせることが観光の一助になっているのではな

いでしょうか。今年は千光寺の公園の展望台も60年ぶりに新しくなります。そうなると思えば多くの方がご来山くださると思いますので、お寺として観光と振興のバランスを上手に取りながら、仏縁を結ぶ方策を考えていかねばなりません。

若い方が熱心に参拝されるのを見てみると、信仰の時代がこれから進化していくのを感じます。その流れの中で修験道や仏教の歴史を大切に守りながら何を発信するのか、時代に即した展開を現在模索しているところです。インターネットでの情報発信はもちろん、芳名帳に記載いただけた方に新聞をお送りするなど、さまざまなお縁のつなぎ方も検討中です。ご縁あればこそ、お寺の未来も開けます。それを尾道の発展につなげていきたいですね。



真言宗大宝山
権現院千光寺

〒722-0033
広島県尾道市東土堂町15-1
TEL: 0848-23-2310
https://www.senkouji.jp

文化や伝統を未来へつなぎ、寺社を活性化させている人や活動。2つの事例を紹介します。

No. 1

神社を集客拠点として 志賀島に人を呼び 世代をつなぎ 新たな時代をつくる



「志賀島金印甘夏酒」と名付けられた甘夏リキュール。神社でも販売するために、酒販免許を取得予定

古きを守るだけでは
伝統が廃れてしまう

金印で知られる福岡県志賀島。かつてこの島には375の神社があり、それを海神の総本社である志賀海神社の神職、阿曇家が守ってきた。権禰宜の平澤憲子さんは、結婚して実家の志賀海神社を離れたが、宮司だった兄の急逝を受けて平成24年から奉職している。

「久しぶりの志賀島は人が減り、神社への参拝も少なくなっていました」これではいけないと感じた平澤さんは、島の小学校の存続に奔走、STEMエンジニアだった前職の経験を生かして神社のホームページを立ち上げ、情報を発信。神社を舞台に

イベントも企画するなど、自分たちが主体となって地域を元気にしていく活動を始めた。神社には歴史があり、文化や伝統も息づいている。それらは地域を結び、集客もできるコンテンツだと考えたからだ。古くから伝わる謡曲『わたつみ』も復曲し、昨年大濠公園能楽堂で公演を行った。「私は地域の神社の神職として、島に人を呼び、島のことを知ってもらうのが役目だと感じています」

志賀島の特産品を開発しようと生産者、酒造会社、酒販会社と協力し特産の甘夏でリキュールを作り、販売している。「歴史を未来へつなぐために、地域の核として神社自身が動いていかないと」。その決意で、さらなるアイデアを模索している。

島の活性化を図る、志賀海神社の平澤憲子さん



デンマーク出身の世界的なフラワーアーティスト、ニコライ・バグマンの展覧会も開催。神社が率先して島の集客のために活動する



平成28年からは、神社の参道や境内を竹灯りで彩るイベントをスタートさせた。島の人達にも加わってもらいながら、毎年夏と正月に継続して開催していく

【志賀海神社】

〒 811-0323 福岡県福岡市東区志賀島 877 TEL : 092-603-6501 <http://www.shikaumi-jinja.jp>

No. 2

それぞれが持つ 物語を込めて 木彫の宗教彫刻で 寺社に遊び心を



種貸社の賽銭箱。「賽銭箱はもともと教義に関係なく、定形はありません。生涯であと10個は個性のあるものを作りたい」と白雲氏

寺社の背景にある物語が
作品の個性を作る

寺社を訪れた人の中には、彫刻作品に目を奪われる人も多い。欄間や向拝木鼻、ご神鏡に賽銭箱、神輿など、寺社の宗教彫刻は日本の信仰の場にはなくてはならない美術品でもある。その宗教彫刻を約120年、三代にわたって引き継いできたのが南部白雲木彫刻工房。三代目白雲・秀水氏は、伝統に遊び心を交えたオリジナルの彫刻作品で多くの寺社から厚い信頼を得ている。「寺社はかつて、病院であり学校であり催事場であり、何よりエンターテインメントの施設でした。これからは寺社は、もっと楽しい場所であって

ていいと考えています」

白雲工房では、寺社それぞれのストーリーを大切にしている。例えば氏が手がけた大阪・住吉大社の撰社、種貸社の賽銭箱には、鯛の上に5円、10円が乗り、そこから芽が出る装飾が施されている。これは穀物の種子、赤ん坊の子種、金を作るための種銭という3つの「種」を授けるといって種貸社の物語を汲み、「種銭として投げた賽銭が大金の芽を出すように」との願いが込められたもの。

「寺社はそこにあるすべてが文化財。技術の進歩によって、まったく同じものを作ることができない時代ですが、文化財はコピーではダメ。それぞれの寺社の物語性を伝える個性を、彫刻で表現していきたいです」

彫刻作品で寺社の個性を表現する、三代目白雲・秀水さん

納品直前の向拝木鼻と白雲氏。南部白雲木彫刻工房のある富山県の井波は、「木彫の里」として知られる。近隣には、お弟子さんたちも含め、200名余りの彫刻師が活動しているという



富山県の越中一宮・高瀬神社は、御祭神の大国主命が神話「因幡の白うさぎ」に縁があることから、白雲氏はその鈴緒にうさぎの彫刻を施した



白雲氏の3人の娘さんたちは、「よしみ工房」として活動中。高瀬神社の「お諭し」として、うさぎを施した玉みくじを奉納している

【南部白雲木彫刻工房】

〒 932-0211 富山県南砺市井波 2174 TEL : 0763-82-0916 <http://nanbuhakuun.com/>

寝弘法さん

【ねいろうぼうさん】



本堂前で存在感を放つ寝弘法さん。真浄法尼を模して造られているため、肩や足先の曲線が女性らしさを感じさせる。寝姿の弘法大師像があるのは日本でもここだけ

開山尼僧の奇蹟にあやかり人々がなでる寝姿像

昭和6(1931)年のこと。道端で出会った僧侶に草鞋銭を渡し、お礼にと弘法大師の姿が描かれたお守りをもたらした女性の身に数々の奇蹟が起こった。女性は出家して真浄法尼しんじょうほうにとなり、寄附を集めて建立された彦根大師堂で生涯を閉じたそう。その大師堂が現在の大師寺。「彦根駅前くわがやちまきの弘法さん」として彦根市をはじめ、尼僧の靈験を信奉する人やその話を聞いた人が各地から訪れる。

参拝者が本堂に入り、まず行うのは「寝弘法さん」をなでること。この寝姿は、尼僧が弘法大師のご託宣を



住職の黒川隆徳さん。境内には「彦根一箇所七福神」と呼ばれる七福神の石像群があり、こちらも参拝者が絶えない

聞いた時に横たわっていたという逸話にちなんだものだ。東寺から仏舎利を勧進して像の内部に安置しており、頭や体を撫でながら願い事をするとご利益があると言われ、その評判は今も広まり続けている。

「真浄法尼の奇蹟をどうやって語り継ごうかと考え、像を造ることにしました」と3代目住職の黒川隆徳さん。初めは本堂の奥に安置していたが、像を見たいと訪れる方が多かったので、尼僧の奇蹟と併せて広く知ってもらおうとしばらく経って本堂前面に出すことに。するといつの頃からか、参拝者が自分の体で痛む場所と同じところを撫でるように。

寝弘法さんに会いに来た際に写経を奉納する人も多く、像の下に大切に保管されている。写経の数は増える一方で、それも人々の信心が集まっている証だろう。



本堂右脇に安置されている真浄法尼の木像。高さ50cmほどのものだが、生き生きとした表情が特徴。昭和の大仏師・西村公朝師の作

地域で守り続ける往時を偲ぶ地元名工の作品

水の神と呼ばれる龍は、仏法を守護する存在としても知られている。寺院の天井絵のモチーフなどに用いられることも多いが、横須賀市の八雲神社では、神社拝殿の向拝から龍が参拝者を見下ろしている。一見すると木彫りとも見紛うほど精巧に作られた立派な龍だが、実は漆喰製。漆喰を鏝で成形して作られた「鏝絵」と呼ばれるものだ。八雲神社の龍は浦賀の左官職人・石川善吉によって明治35(1902)年に作られた。かつて廻船業で栄えた浦賀には土蔵が多く、漆喰壁を塗る左官職人もたくさんいたといわれる。彼らは神社に限らず、地域の寺や



1985年、社殿の屋根は、重く建物に負担のかかる瓦からステンレスへと変更。変更前の瓦の宝珠が今も境内に残る

町内会館、住民の個人宅までさまざまなところに、左官の技巧を凝らした鏝絵を残した。なぜ神社に龍なのかは不明。八雲神社は、明治の廃仏毀釈によって寺院を廃して再建された神社。元の名を大谷山満宝院八雲堂といい、建物は当時のお堂をそのまま利用している。ゆえに鳥居もなく、現在も宝珠が屋根に乗る状態。拝殿内には龍の天井絵が描かれており、その下には護摩台も残る。向拝の鏝絵の後ろには、長さ約2m70cmの長い木刀も奉納されており、これらはすべて大山講の修験の寺だった名残りだそう。

八雲神社は宮司が不在だが、町内会で守っており、毎年6月には地域の祭礼も開催されている。仏教、神道の壁を超え、神社の存在は地域のかげがえのない心の拠り所でもある。伝統を伝える鏝絵と共に、その歴史はこれからも受け継がれていく。



社殿の中央には、護摩台が置かれており、その真上に龍の天井絵はある。こちらまた、力強く人々を見守っている

龍の鏝絵

【りゅうのこてえ】



八雲神社では、神殿などの細かい修復作業は、町内会や近隣の大工らによって行なわれている。しかし、漆喰で作られ、崩れやすい鏝絵だけは、触らずに維持・保存してきた

地域の左官職人が残した貴重な作品

普賢院から車で5分ほどの大間崎には、マグロのモニュメントがある。一本釣りの漁場は目の前に見える島周辺。目と鼻の先だ



テラハク
レポート

本州最北端の大間崎で
一本釣りの極上の味と
森の静寂に浸る



おおま宿坊
普賢院
〒039-4601
青森県下北郡大間町
大字大間字内山 48-137
TEL : 0175-37-4649
<https://www.ooma-fugenin.jp>

生マグロに舌鼓を打つ 1日1組限定の悦楽

地元のため、寺のために
名産と仏教に触れる宿坊を

大間と言えば日本屈指のマグロの産地。屈強な男達が命をかけて一本釣りしたマグロが大間崎周辺の飲食店や宿で楽しめるのだが、なんと宿坊でも、多彩な料理で提供してくれる。平成30年4月に誕生した「おおま宿坊 普賢院」は、曹洞宗大洞山福蔵寺の別院で、木々に囲まれた三千坪の広大な敷地に普賢延命菩薩、薬師如来、不動明王を祀っている。その敷地内にある「佛光庵」が、1日1組を存分にもてなす宿。庭園を眺めながら

がら瞑想できるサンルーム、鳥の声で目覚めるベッドルームが静寂に佇んでいる。宿泊客はこの贅沢な環境で時を過ごし、坐禅や写経などのプログラムを体験する。坊を預かるのは、院代の菊池雄大氏。大本山永平寺での修行後、東京、北海道での務めを経て自坊に戻り、ここを開いた。

ことを決意したときにこの思いを住職に伝えたら、二つ返事で賛成していただけました」とは言っても、ただくつろげる場所を創っただけでは、人が来てくれないかも知れない。そこで日本中に知られる大間のマグロを夕食に提供することを思いついた。「夕食が曹洞宗の精進料理では、量が少なくお腹がすいてしまうかも知れません。そこで朝食に提供して、夜はマグロをいろいろなメニューで楽しんでいただくことにしました」

夫を凝らして提供する。もちろん菊池さんも、食事はゲストと共に草を囲む。おいしいマグロを味わっても、自坊のことなど時間が許す限り話をするのだ。町内の寺院が醸造している地ビールなども、会話を盛り上げる名脇役。



食事は宿坊ではなく、別棟の食堂で。一枚板のテーブルを囲み、夜ごと宿泊客との談笑が続く



宿坊に着いたらまず曹洞宗で出される梅湯(ばいとう)でもてなしを受ける。翌日の朝食はおかゆを中心に胡麻豆腐や炊きものなど



「夕食が曹洞宗の精進料理では、量が少なくお腹がすいてしまうかも知れません。そこで朝食に提供して、夜はマグロをいろいろなメニューで楽しんでいただくことにしました」

青森の新聞やテレビで紹介されたことで、女性同士の客など訪れる人は増えてきた。「今後は日帰りプランも始めたいと考えています。もっと気軽に坐禅や写経、写仏を多くの方に経験していただき、仏教に触れてもらえる場所にしたいですね」



マグロは赤身、中トロ、大トロの食べ比べに山かけ。旬の魚介のカルパッチョやアワビ、もずくなど大間で獲れる海鮮を提供する。大間産岩のりで握るおにぎりも好評だ



宿坊の中は上質な山小屋のよう。サンルームの窓の外には、庭園に咲く季節の花々。近くに温泉があり、宿泊客には入浴券を提供している



「佛光庵」は庭園の中程にある。サンルームには瞑想用のイスや書籍が用意されていて、思い思いの過ごし方ができる



普賢院には、道を隔てた場所にゲストハウスもある。佛光庵は2名用だが、人数が増えた場合はゲストハウスも利用してもらおう仕組み



福蔵寺住職の菊池泰進さんと院代の雄大さん親子。地元のために寺院ができることを考えたい、という思いは同じ



上は普賢院本堂。境内の一番奥にあり、動行や坐禅体験などをここで行う。左上が福蔵寺。宝暦4(1754)年に開創された地藏院を基とする。左は福蔵寺向いにある八大龍王殿。文久元(1861)年以来、大間の漁師たちに信奉され続けている

宿泊で寺社と地域を元気にする
WEBサービス「テラハク」
<http://terahaku.jp>
TEL: 06-6356-2090 (株式会社 和空)

風まかせ

「風

まかせ」の連載、あつという間のようでもあり長かったなあとも思える四年間であった。ここで、これまでの資料の整理もかね、もう一度ゆくりとこの国の成り立ちやその骨格となる精神といったものを考え直してみたいと思うに至った。そこで、まことに残念であるが今回をもって

迷宮の扉を開き

さらに奥を訪ねて

寺社行脚はつづく

御朱印帳を携えての道程は、この国の歴史から寺社の今をみる旅。そんな4年間の連載が終わる。遍歴を振り返るとそれは、次の旅への道標でもあった。さらなる思索の旅は謎の迷宮の入口へと向かう。

「風まかせ」の最終号とさせていただきます。といただくことになった。

この間、大好きな日本書紀や風土記、古典文学のな

かで物語性豊かに語られた場所を推理小説を読み解くようにさがし尋ねては、舊き時代に思いをはせた。さらにお能や謡曲といった伝統芸能ゆかりの地などにも足をはこんだ。

書紀が相当の紙幅を割く神功皇后の伝承地を車で走り廻った福岡の宗像市から糸島市、さらに海を渡って対馬まで旅をした。お能の「融」の主人公、嵯峨天皇の皇子・源融が

風雅なるも数奇な人生をすごした六条河原院跡を探しとめた京都・本塩竈町への道行き。藤原俊成・定家親子や小倉百人一首ゆかりの地をたずねては歌人の墓所まで遍歴もした。また、継体天皇や渡来人の足跡がつぎつぎとあらわれる琵琶湖沿岸の史蹟に目を輝かせては次なる伝承地へと歩をすすめた。そして、近江国高島郡三尾崎から流れ出した霊木伝誦を耳にするや心躍らせ漂着先の大和長谷寺や讃岐志度寺まで足を伸ばしたこともあった。

そんな寺社NOWな旅の思い出は介護保険第一号被保険者となったわたしの貧弱な背中では背負いきれないほどの嵩になっていた。そこで、冒頭で述べたようにここで一旦立ち止まり、これまで疑問がわいても締め切りに追われ後回しにした事柄や参考にした貴重な資料を、通り一遍でなく思索をふかめたい、もう一段も二段も先によこたわる謎に迫りたいとの思いに

「か」と問うたところ「納経帖である」と応えた。「わたしもいただけのか」とかさねて問うと「諾」と応じた。そして求めたのが何の変哲もない黄檗色の分厚い帖面である。青年僧は表紙に納経帖と墨書しわたしの名前も記してくれた。御朱印帖の旅に一步をきざんだ瞬間である。御朱印帖は納経帖ともまた集印帖ともいうのだそう、わたしの書棚にも十五年間の星霜を経てその三種類の帖面がそろっている。いま、その十一冊目がおわろうとしている。直近の御朱印は平成三十年十一月二十七日付の松山市の伊予豆比古命神社(椿神社)である。次なる頁にはさてどこの社寺がその名を留めるのか、これもまた旅の一興である。



実在したのではなく、筑紫で誕生した応神

天皇はなぜ敦賀の氣比大神と名前を交換したのか、その意味するところは、近江国高島郡三尾生まれで、越前国育ちの応神天皇五世の孫、継体天皇とは実のところはいかなる系譜につながる人物なのか、さらにその生誕地から流出した霊木伝誦とは後世の人たちに何を伝えんとして生み出されたのか、その継体天皇の御代に勃発した筑紫君磐井の乱の実相とは何かなどなど、ひとつの謎はあらたな謎を生み、そのまた次の謎にからみつくといった、まさに謎の迷宮へと足を踏み入れたようなものである。これからその迷宮の扉をひとつひとつこじ開けてはその奥の部屋へと分け入っていききたい。わたしに残された時間でどれほどの謎がとけるのか目的地的



1. 御朱印帖は蛇腹折り 2. 初めての御朱印(醍醐寺) 3. 11冊目を数える御朱印帖



の無い旅のようでもあるが、夢家のドン・キホーテよ

ろしく、公爵夫人がサンチョ・パンサに「片側から一瞥するだけでは、人が眺めるものの全体は見渡せない」と放った警句を肝に銘じ社寺行脚をづけていこうと思っている。

わ

たしは「風まかせ」執筆のスタートにあたり、旅に出る際、御朱印帖

を必ず携行し、社寺参拝ののちいただく日付入りの御朱印がわたしにとって公文書の旅日記であり、人生のアドバイザーのようなものであると書いた。そこで、あらためて書棚にならぶ御朱印帖を開いてみた。一冊目は平成十五年三月三十日の日付で京都・醍醐寺の御朱印からはじまっていた。どまんなかにかすれた墨書で「薬師如来」という文字が達筆でした

ためられている。それを目にしたとき、十五年前のあの日の光景がまざまざと臉のうちに浮かびあがってきた。大講堂の肅然とした堂内で一心に筆をはこぶ若き僧侶に「それは何

現

在、若い女性を中心に御朱印帖ブームが到来、各地の社寺ではカラフルな帖面や意匠を凝らした御朱印がふえてきている。本来、御朱印は写経や納経をし

た証としてお寺が授けるものだというが、今はそんな堅苦しい



ことはいわずに参拝したあと社務所や納経所

でいただけるようになっていた。スタンプラリーではあるまいしと眉を顰める向きもあろうが、動機は何であれ若人が社寺に足をはこんでくれるだけでわたしは良としたい。境内の凜とした靈氣にふれ何かを感じ得し、社寺を再訪する人たちがふえてくれればそれはそれで素晴らしいではないか。

わが国の歴史のなかで神社・仏閣はながく共同体の中核をなしてきた。が、地方の過疎化などを背景に、今後、社寺消滅が加速するとの厳しい見通しが示されている。その打開策のひとつとして、社寺自らが地域社会にもっと能動的にコミットし率先して汗をかき、共同体再建の肝いりとなる覚悟をもつべきと社寺を愛する者として衷心から問いかけたい。

さて、残念ながら紙幅が尽きた。最後に、寺社NOWに拙稿の連載を許していただいた全国寺社観光協会に謝辞を呈し筆を置くこととする。

野田博明のひろあき



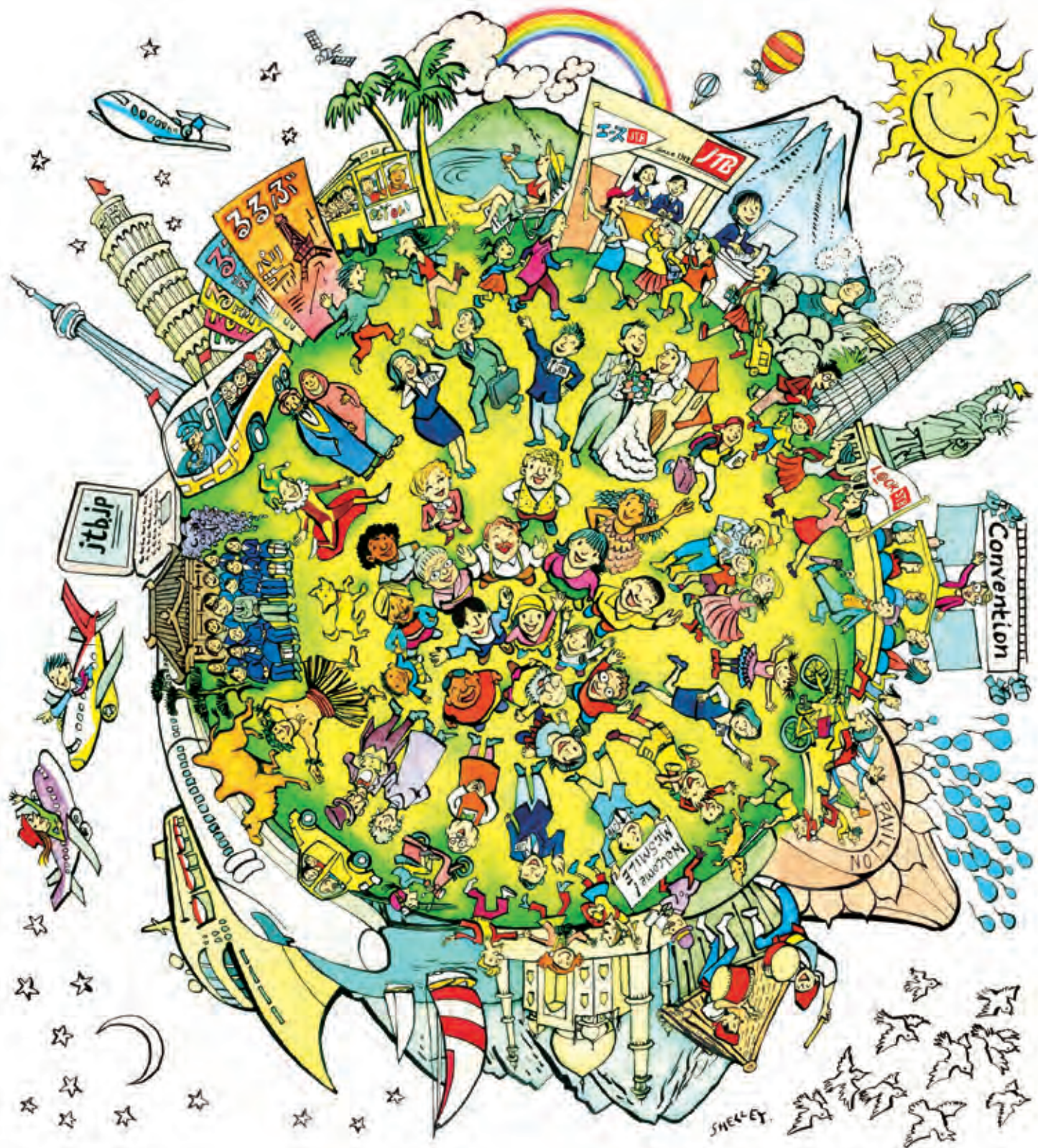
四国88か所伊予の泰山寺にて

昭和26年生まれ。東大卒。日本興業銀行広報部長などを経て、現在、一般社団法人全日本社寺観光連盟理事。平成29年文化庁「文化財の他言語解説等による国際発信力強化の方策に関する有識者会議」委員。平成30年広島県神社庁主催の研修会にて講演。

4. 直近の伊予豆比古命神社の御朱印 5. 伊予豆比古命神社の本殿 6. 定家の百人一首が書かれた厭離庵の御朱印



感動のそばに、いつも。



人をつなぐ、笑顔をつなぐ。
JTBは地球を舞台に、
あらゆる交流を創造し続けます。



ユネスコ文化サテライト勘定技術諮問委員会第1回会議(6頁参照)の初日、建長寺にて参加者の皆さんが記念撮影。ここから、伝統文化の発信に向けた新たな時代が動き出した。

寺社Now

Vol.23

編集後記

人気雑誌の編集長や観光の専門家に寺社の魅力を聞いた特集(10-17頁)。彼らは一様に「寺社はまだまだ切り口がある」と感じているようだった。寺社とメディアとの距離がもっと近くなれば、より消費者に有益な情報発信ができる。どんな世界でもそうだが、異業種とのタグによる相乗効果は計り知れない。(H)

御朱印帳は寺社のマーケティングツールになりうる。そう気が付かされたのは尾道千光寺でのこと。参拝客から差し出される御朱印帳をパラパラめくると、一つ前、二つ前はどこから来たのか周遊ルートや人の流れが読み取れると聞いた。毎日の小さな一つひとつの積み重ねがやがて大きな知恵となる。(W)

無料送付の継続希望

「寺社 Now」無料送付の継続をご希望の場合、[寺社名・氏名・住所・電話番号]をご記入のうえ、下記 FAX またはメールアドレス宛にお送りください。ご意見・ご感想もお待ちしております。



バックナンバーが
WEBでご覧いただけます

jisy-now.com

または [寺社NOW](#)

お問合せ

一般社団法人
全国寺社観光協会 本部事務局

TEL : 06-6360-9838 FAX : 06-6360-9848
e-mail : info@jisy-kk.jp

次号は
2019年3月発行の
予定です。

監修
一般社団法人 全日本寺観光連盟

発行人
一般社団法人 全国寺観光協会

編集・制作協力
株式会社 glass

発行所
一般社団法人全国寺観光協会(事務局)
〒530-0044
大阪府大阪市北区東天満1丁目11番13号
AXIS 南森町ビル 11F
Tel : 06-6360-9838 Fax : 06-6360-9848

寺社 Now
第23号 平成31年1月発行

本誌の表紙、記事、写真、イラストはすべて著作権法で保護されています。発行人の許諾なしに複製(コピー)したり、印刷物やインターネットのWEBサイト、メール等に転載したりすることは違法となります。



挑戦の 数だけ、 保険が ある。

保険は、冒険から生まれた。
大航海という挑戦を助けるために、
勇気をつくるために、
保険は生まれた。

さあ、挑戦しよう。
人は何かを始めることで前へ進み、
世界は新しく変わってゆく。
不安も、きっとあるだろう。
でもそれは、分かち合うことで軽くなる。

世の中には2種類の人がいる。
挑戦する人、しない人。
充実した人生を送るのは、
どちらの人だろう。
人から愛され尊敬されるのは、
どちらの人だろう。
世の中を変えていくのは、
どちらの人だろう。

私たちはすべての挑戦を応援します。

To Be a Good Company
東京海上日動



JOCゴールドパートナー(損害保険)